

はしがき

この文章を綴っているのは一九九一年二月のソ連崩壊からちょうど三〇年の節目を迎える二〇二一年の一月二月であるが、たとえば四五年に終わった第二次世界大戦は、その三〇年後である七五年にはもはや完全に歴史的な経緯となっていたと言えることができるだろう。しかし冷戦もまた同じように、その終焉から三〇年を経て完全に「歴史」になったと言えるのかどうか、今の時点ではまだ答えることは難しいかもしれない。ソ連崩壊後に誕生したロシアはなお、アメリカおよびヨーロッパにおけるその同盟国との間で地政学的な緊張関係にあり、米口の核武装はなお、冷戦最盛期の米ソほどではないにせよ、巨大な規模に達している。米ソ冷戦の根幹にあった経済システムのあり方をめぐるイデオロギー対立は消滅したかもしれないが、冷戦時代に遡る統治システムのあり方をめぐる対立——自由で多元的な民主主義体制と一党独裁的ないし権威主義的な体制との対立——は依然として消滅していない。今日では、本書が対象とする八〇年代初頭の米ソ間の新冷戦とはまた異なるものとして、人権や自由といった価値をめぐると対立と地政学的な対立が結びついた米中間の「新冷戦」が云々される状況でさえある。

それでも、四〇年代後半から九〇年代初めに存在した、米ソ対立に由来する世界規模の緊張関係としての冷戦を「始まり」と「終わり」を有する「歴史」として振り返り、その間の変遷を世界史の中に位置づける試みはいっそう盛んになるばかりである。本書執筆者の一部が翻訳作業に従事したOdd Arne Westad, *The Cold War: A World History* (New York: Basic Books, 2017) (O・A・ウェスタッド(益田実監訳、山本健・小川浩之訳)『冷戦 ワールド・ヒストリー』上・下(岩波書店、二〇二〇年))に代表される、本格的な冷戦史の「通史」もようやく出現し始めている。それと同時に冷戦の特定の局面、とりわけそれが終焉に向かい始める過程、終焉する過程、そして終焉後の新たな秩序形成が模索される過程に関する、本格的かつ詳細な分析作業も内外で盛んになっている。

本書もまたそのような作業の一部をなす成果であり、先に上梓した益田実・青野利彦・池田亮・齋藤嘉臣編著

『冷戦史を問いなおす——「冷戦」と「非冷戦」の境界』（ミネルヴァ書房、二〇一五年）とは、完全に同じ執筆陣による姉妹作の関係にある。前作は冷戦の始まりである四〇年代半ばから八〇年代初めまでの時期を対象として、米ソ冷戦あるいは東西冷戦と呼ばれた世界規模の巨大な対立の歴史について、それに先行する、あるいは並行する他の世界史的な変化との関連を問いかけながら再検討し、「冷戦」と「非冷戦」の境界を探索したものであった。

その直接の続編として企画執筆された本書は七〇年代後半から八〇年代前半までの一〇年程度という時期に対象を絞り、この間に生じたグローバルな規模の世界史的变化と、並行して生じた冷戦史的变化の間の関係性を問うものである。それはすなわち、その後まもなく生じる冷戦の終焉につながる契機となるとともに、冷戦終焉後今日に至るまでの国際社会のあり方を決定づけることになった「グローバル化」として知られる諸変化が、デタント終焉から新冷戦へと向かう東西関係の変化との間でいかなる関係を持ったのかを明らかにすることである。

序章において詳述するように、本書が前提とする認識は、七〇年代半ば以降のグローバルな諸変化が八〇年代になり冷戦秩序を大きく揺るがし、九〇年代以降、ポスト冷戦時代の国際秩序を生み出すことになったというものである。この認識を踏まえるなら、我々が今後、冷戦が終焉に至るまでを含む冷戦史の全体を解明し、冷戦がいったい何を意味していたのかを理解するうえでまず必要な作業は、七〇年代に見られたグローバルなレベルでの世界史的变化と冷戦史的变化との間のつながりを解明することに他ならない。そしてその作業は、冷戦史に関する理解をもたらすにとどまらず、冷戦終焉後になお一層の進展を遂げてゆくグローバル化の果てに生み出された、ポスト冷戦社会を理解していくうえでもまた、必要不可欠な作業となるのである。その意味で本書は冷戦史の一端を解き明かすとともに、それをその後のポスト冷戦史へと架橋していく作業の一部でもある。もちろん今はまだ、ここに提示できる成果は不十分なものにすぎない。しかし本書が広く読者諸賢の目に留まり、我々が暮らす今日の世界はいかにして成り立ってきたのか、という問いかけへの答えをもたらす一助となることを願う次第である。

二〇二一年二月二五日

編者を代表して 益田 実